

文窓

ふみのまど

神戸大学文学部 同窓会 文窓会
 事務局：〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
 ☎ & FAX (078) 806-7207
 (月、水曜日の午後3時以降)
<http://www.kobe-u.biz/bunsokai>
 文学部：☎ (078) 803-5595 FAX 078-803-5589
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp>

13号
2015.9.30

振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

第10回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2015

— Kobe University Homecoming Day 2015 —

10/31(土)

神戸大学ホームカミングデイ2015

出光佐三記念六甲台講堂(登録有形文化財)
 12:00頃～ティーパーティー(記念式典終了後)

※詳しくは 下記のホームページをご覧ください。

第10回 神戸大学 ホームカミングデイ 検索

文学部でのホームカミングデイは、午後から!!



誘い合わせて、お気軽にお越しください!

文学部ホームカミングデイ2015

- 13:00～13:30 受付 文学部 B棟132教室
- 13:30～13:40 文学部長挨拶
- 13:40～14:50 講演
「戦後の終焉—戦後史から現代を考える—」
河島 真 准教授(日本史学)
- 14:50～15:20 学生によるスピーチ
- 15:30～16:00 第9回文窓賞(学生レポートコンクール)
授賞式 及び受賞者スピーチ
- 16:00～16:20 文窓会総会
- 16:30～18:00 懇親会 瀧川記念学術交流会館
(参加費: 3,000円/当日)

<併設企画> 12:50～16:30
 (文学部 B棟132教室前)
 神戸オックスフォード日本学プログラム
 (KOJSP)の活動記録等

■お問い合わせ先 人文学研究科総務係
 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
 Tel: 078-803-5591

文窓会(文学部同窓会)ホームページ
<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/>

講演「戦後の終焉—戦後史から現代を考える—」河島 真 准教授(日本史学)

今年は敗戦から70年目ということで、戦争を記憶し直す動きが活発になりました。しかし昨今の動きは同時に、戦後とはいかなる時代であったのかの問い直しを、否応なく私たちにせまっています。

ホームカミングデイの講演では、敗戦は何の終わりかで何の始まりであったか、そして現代において、何が終わりで何が始まるのかとされているのかを、戦後の社会と「知」の変遷を通して考えてみたいと思っています。

*第9回文窓賞(学生レポートコンテスト)入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。

(今年はぜひ、あなたも輪の中に!) 第9回文学部ホームカミングデイ2014(10月25日)の様子

今年もぜひ誘い合わせてご参加ください!!



特集 / 私の戦後とプレ六甲台時代 (2回生～9回生の有志先輩による体験記)

第9回文窓賞2015年 学生レポートコンクール結果速報!

初の女性文学部長、増本浩子先生ごあいさつ

文学部ホームカミングデイ2015 [10月31日(土)]



国立大学から文学部をなくさないために

人文学研究科長・文学部長
文窓会名誉会長 増本 浩子

4月に藤井勝先生が研究科長・学部長の任期を残して理事・副学長に昇進されたことに伴い、思いがけず人文学研究科長・文学部長に就任いたしました。私は神戸大学に赴任してからまだ日が浅いのですが、文学部を思う気持ちは歴代の学部長と同じです。文学部のために持てる力を尽くすつもりですので、どうぞよろしくお願いいたします。神戸大学は4月に学長が交代して執行部が一新したことに加え、第3期中期計画・中期目標の開始を来年に控えて、大きな転換点を迎えています。新学長が掲げた目標は「世界ランキング100位以内、国内ランキング5位以内」というものです。数字よりも理念にこだわる人文系の人間としては、このような目標設定自体にすでに違和感があるのですが、大学本部はこの目標を達成しようと躍起になっています。このような動きの中で、ランクアップに大きく影響を与えることのない人文系は縮小を迫られることになりました。国際文化学部と発達科学部が整理統合されることによって、人文系3学部が2学部になってしまうことはす

でプレスリリースされた通りです。今後は人文系全体の規模が縮小され、代りに理工系が厚みを増していくことになるかと予想されます。

理系偏重の風潮は神戸大学に特有の現象ではありません。政府がそのような方針をとっているのです。メディアでもいろいろ取り上げられたのでご存知の方も多いと思いますが、今年の6月8日に文部科学大臣名で全国の国立大学に対し、「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」という通知がなされました。この中で大臣は、教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院は、「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう」努めよ、と要請しています。上に述べたような人文系3学部の再編は、この要請に応じたものと言えます。

通達にある「社会的要請」というのは経済産業界の要請という意味でしょうが、要するに金儲けにつながらない学問は不要だ、と言っているのと同じことです。そもそも教育研究は短期的な金儲けに直結するものではなく、未来への一方的な投資ですから、この愚策のつけが回ってくるのは10年後、20年後の未来です。国立大学が文科省の望む方向に「改革」され続ける限り、日本の未来は暗いものとなるでしょう。そうならないためにも、私たちは人文学という基礎学問を堅実に教育研究する場としての文学部を何としてでも守っていかなければなりません。



無関心は罪

文窓会会長 16回生
武藤 美也子

去年の同窓会文窓会の総会で会長に承認され就任いたしました。今後ともよろしくお願いいたします。

前号では「魅力ある同窓会」という題をつけましたが、それは卒業生の皆様と同窓会を身近に感じ活動に参加してもらうにはどうしたら良いかと考えたからです。

文窓会は昭和28年設立で、早60年近くの年月が経っています。そこでまず文窓会の基盤となる規約を現実に即したものとし、活動を活発にするために見直しを行いました。

その上で長年開催されていなかった幹事会を開催。幹事とは卒業年次の各回生の中から1名置くことになっています。ただ近年はその幹事の任命も有名無実のものとなって、幹事ご本人が幹事であることをご存じなかったり、何回生かは幹事が決まっていなかったりしています。同窓会の活発化にはこの幹事の方々のご協力がなければどうしようもないわけで、6月28日に久しぶりに幹事会を開きました。予想通り常任幹事以外の幹事出席者は7名に過ぎず、卒業生にとって同窓会の存在が極めて薄いということを実感されました。

皆様もご承知の通り近年人文系学部の統合、廃校が

増えています。これは理系を実学として重要視し、文系は必要性の低いものとする政府の考えを受けたものといえます。現に神大でも発達科学部と国際文化学部の統合が3年後に決まっています。学際的研究が重要視されている現在において、人文科学系を縮小するという事は片手落ちで非常に危険なことではないでしょうか。

今年の文窓会主催の学生論文コンクール(次頁参照)への投稿は、期せずして全部が文学部の存在意義を見極めようとするものでした。それは文科省の実学偏重、理系重視、文学等の人文系を軽く見る社会の動向に、当事者の学生が危機意識を感じたからだったのでしょうか。

後輩たちが文学部の存続について危機意識を感じている時、卒業生である我々が傍観していて良いのでしょうか。多感な青春の時に、学問を通じて新しい世界を見せてもらい、それが基盤となって今の自分の存在があるのではないのでしょうか。

「無関心が一番の罪だ」と言われます。安保法制も然りですが、今日本の社会は大きく変わろうとしています。今までは関係ないと見ていた母校のことにいきさかでも関心を持っていたら、それだけでも文学部並びに後輩たちにとっては大きな力になります。

毎年送る同窓会機関紙「文窓(ふみのまど)」を読んでいただき、文学部の情報を得、毎年10月最終土曜日に開催されるホームカミングデイに参加して神大の現状と懐かしい神大を身近に感じていただきたい。

今後とも同窓会をよろしくお願いいたします。

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第9回 文窓賞 2015年

学生レポートコンクール 結果発表

神戸大学文学部に入学し、学生生活においてチャレンジしようとしていること、またなしたことで、そのような目標や現状・体験をレポートしてもらおう(文窓賞)学生レポートコンクールに、今年は残念ながら3名の応募しかありませんでした。この3編について9月4日に選考会を行い、下記の作品が受賞作に選ばれました。

■最優秀賞 (表彰状と賞金10万円)

該当者なし

■優秀賞 (表彰状と賞金5万円)

「机上の空論」

赤羽 佳奈子(国文学専修2回生)

筆者は、言葉は世界を広げるもので「自分の世界の広さは、自分の知っている言葉の数に比例」すると考える。文学は机上の空論であり実学重視の社会の流れの中で、無用の長物と考えられるようになって来ている現状は、そのように考える筆者にとって受け入れられないことである。そこで本は実用的な意味で自分の世界を広げる力を持っており、本を読むことにより「実学を動かせる脳」となることができると説く。そして文学軽視の現在のあり方に疑問を発する。

去年の優秀賞に選ばれた自身の応募作品の上に立って、1年間の歩みを振り返っている。的確な表現と、簡潔でわかりやすい文章で、すつと文意が伝わってくる。

佳作 (賞金1万円)

「留学で得たもの、あるいは薬味の効用に関する一考察」 筒井 瑞貴(英米文学専修4回生)

留学中の自炊の中で、チャーハンに葱を加えただけでチャーハンが別物の豊かな食べ物に変化することを体験する。そして文学もそのようなものだという。文学が主食になるはずはないが、「人間を真の意味で人間たらしめる営為が、文学において他に存在しようか」と説く。

ふと出会ったチャーハンにおける葱の効用を実感することにより、虚学といわれる文学の意義を説く。葱から文学の意義にまで広げるこの発想力がおもしろい。

「20年分の「無駄」を生きて」 木村 薫(フランス文学専修3回生)

大学生として多様な経験をしたい。それが回り道に見えても、いつか意義を持つてくる。回り道のできるこそ、大学生生活の意義である。として自分が大学に入ってから取り組んだ事柄について説明している。ただ体験の羅列という感があり、一歩踏み込んでその経験によって自分がどのようなものを得たのかを書いてほしかった。

選考を終えて

今回の3編はすべて自分の学んでいる人文系学問と文学部の意義を説いた作品であった。実学重視で自然科学系、理化学系が重視され、人文学系の学部の廃止が増えている現在において、当事者の学生が危機意識を最も痛切に感じたかからに他ならないだろう。このようなきっかけであったとしても、自分の拠って立つ文学について考察を深めることは

有意義であったと考える。

今年は3編の応募というきわめて寂しい実情であった。この低調さが何に由来するのかを考え、来年度からの文窓賞のあり方等について考えなければならぬと思っている。

(文責 審査委員長 武藤 美也子)

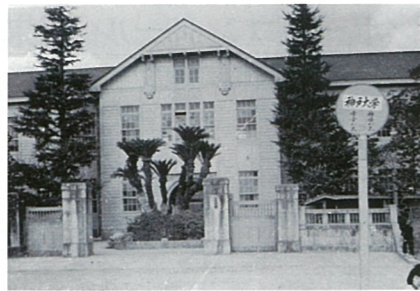
選考委員

増本 浩子学部長 山本 秀行副学部長 市澤 哲副学部長 武藤 美也子 日高 健一 花木 直彦 廣野 幸夫 西川 京子 吉田 浩次 田中 賢司 三宅 征彦 田中 康二 河島 真

戦後70年の節目を迎えた今年、文窓会の諸先輩方のなかには、1945・昭和20年終戦当時、あるいはその4年後、国立学校設置法によって神戸大学が設置され、産声をあげたばかりの文学部の前身・文理学部文科で学んだ方がはつらつとしてご健在である。当時の貴重な思い出と胸に秘めた想いを、戦後や昭和を知らない世代につなぐべく語っていただいた。



A 教育学部住吉学舎／赤塚山(1968・昭和43年頃) 本部事務局提供



B 姫路分校(1958・S33頃)「工学部機械工学科1958年卒業記念アルバム」



C 御影分校(1958・S33頃)「工学部機械工学科卒業記念アルバム」1958
*完成した当初は、写真の右半分だけ。後年増築された。

文学部・御影学舎の思い出

上田 雄 (2回生) 1954・昭和29年卒業／史学科 国史学専攻

御影師範学校

私の経歴書は[1931年・神戸市生まれ]で始まりますが、それを見るときいつも違和感を覚えます。何故なら私が生まれたのは神戸市ではなく、兵庫県武庫郡住吉村だからです。(神戸市になったのは、私の大学在学中のことでした)

生まれた家は昔のままの西国街道に面する商人宿で、私の幼児の頃は、まだ富山の置き薬屋さんや、輪島の漆器屋さんなど、全国をセールスして廻る商人さんの定宿でしたが、時代の波とともにそのようなお得意さんが減ってきていたので、それを埋め合わせるように、御影師範学校の学生さんを下宿させてもいました。

この当時の御影師範学校の学舎は、阪神御影駅の北側にあり、赤煉瓦造りの明治期風の立派な校舎でした。その場所は今は阪神百貨店等の商業施設になっていますが、かつては私が卒業した神戸大学文理学部の学舎の存在した所、行政区では御影町でしたが、住吉村の私の生家からは僅々500米ぐらいの所でした。

思えば私は幼児の頃から、この地と何か縁があったような気がします。

もともと、その後戦争が激化して行く過程で、御影師範学校がどのような変化をしたのか、幼児期から少年期の私には知る由もありませんが、次にその存在を知ったのは大学受験の時の試験会場となった、住吉村赤塚山に建つ瀟洒な石板貼りのコンクリートの校舎(写真A)でした。その時点では、この学舎は御影師範学校ではなくって、

急造の神戸大学の教育学部の学舎となっていたのですが、その立派な造りからして、まだ豊かだった戦争初期(1940年頃か)の頃の建築だったと思われれます。

タコ足神戸大学

戦後の教育改革で誕生した神戸大学は、六甲台の神戸経済大学を主体として、教育学部は御影師範(住吉学舎)・明石女子師範(明石)、工学部は旧制の神戸工業高専の西代学舎と松野学舎、教養学部は住吉学舎と旧制姫路高校の姫路学舎(姫路:写真B)と、文字通りのタコ足大学でありました。

入学後の1年半は、全学部生まとめた教養課程の授業があったのですが、学生数が多かったため、教養課程は住吉と姫路に分けられていました。私は住吉でしたが、この時間割と言うか校舎割(教室割か)が極めて変則的なもので、私たちは月火木金は住吉学舎、水土は六甲台という授業形態、いずれにしても毎日が山登りでした。その頃にもバスはありましたが、本数は少なく貧乏学生にとっては高価だったので乗った記憶はありません。

その頃、今の六甲台の文学部がある辺りは、六甲ハイツと呼ばれるアメリカ占領軍の高級将校の住宅台地で、入り口には自動小銃を持った兵士が警備【OFF LIMITS】の厳めしい看板が日本人を睨み付けていました。

有刺鉄線の金網のフェンス越しに見えるハイツには、赤や緑のパステルカラーの小粋な住宅が建ち並び、カラ

フルな洋服を着た若い将校夫人たちが子供たちと楽しそうに遊んでいる風景が垣間見えました。

私たちは「あの家々には電気掃除機や電気冷蔵庫があるそうだな」などと、話しながら覗き見していましたが、実はその頃の私たちは誰も電気掃除機や電気冷蔵庫の実物を見たこともなかったのです。そんな占領下の貧しい時代だったのです。

※一般教養課程

たまたまこの稿執筆中の8月19日の朝日新聞によると、各大学ともパンキョーと略称される一般教養課程は廃絶の傾向にあるそうです。それにしてもパンキョーとは、なんたる略称の仕方かと、旧人類の私は愕然としたことでした。

御影学舎の建設

そんな貧しい中でも神戸大学文理学部の学舎建築の予算が通り、1951・昭和26年、阪神御影駅北の昔の御影師範の跡地で建設が始まったのですが、前年から始まった朝鮮動乱(南北朝鮮間の戦争)のため、建設資材が急騰し、当初の予算では、全体の建設は無理になって、やむを得ず、半分だけの建設となり、なんだか中途半端な校舎が出来上がりました。(写真C)

しかし、それでも文学部は初めて独自の学舎を持つことができ、その年に専門課程に進んだ私たちは、山登りから解放されて、日当たりの良い明るい、そして暖かい御影学舎で講義を受けるようになったのです。当時は暖房など無かった時代ですから、南面ガラス張りの教室は、冬は暖かく快適、しかし睡魔と戦わねばならない戦場でした。

こうして、文理学部は、文科、理科とも独自の校舎で活動を始めたのですが、この段階では、此所が終の棲家だと思ひこみ、文学部や理学部が後に六甲台へ移ることなど、誰も夢見だにできなかったことでした。

文理学部文科卒業

こうして私たちは新設成った御影学舎で専門課程の講義を受けたのですが、勉強大嫌だった私でも高尾一彦先生の「続日本紀講読」だけは興味をもって受講しました。その縁で奈良時代の遣唐使や渤海使に興味をもって研究を続けているうちに、晩年になって、全くの偶然でそれが講談社の編集者の目に留まり、同社の現代新書



【写真説明】学舎の新築成り、屋上にて喜びの記念撮影。これだけで史学科(国史・東洋史・西洋史)の1~3回生のほぼ全員。前列右端が筆者。後列右から2人目が後年、お笑い番組でテレビ界を席捲した澤田隆治氏(国史3回生)。ちなみに教養課程だった4回生には文化功労者に選ばれ、文化勲章を授与された脇田(麻野)晴子さんがいました。背景の六甲山が戦時中の濫伐のため禿げ山になっていることがわかるが、この禿げ山の部分は今は無き鶴甲山!六甲アイランドの埋め立て土となりました。画面筆者の背後のガレ状態になっている所が教育学部附属小中学校、澤田氏の左に見える白い建物は甲南病院。

で『渤海国の謎』と言う新書を1992年に出版することができました。同書は1999年9刷をもって絶版となりましたが、2004年その改訂本として同じ講談社の学術文庫として『渤海国』が刊行されました。この本はソソボソとですが現在もなお第5刷を発売中です。

その『渤海国』発売直前のことですが講談社から電話があり「上田さん、あなたの経歴は学歴詐称になりすよ」とのこと、「???」と思って聞いてみると、講談社にはく鬼の校閲部>と呼ばれる部門があり、そこでの調べによると、私の卒業時、1954年、神戸大学には文理学部は存在しないと言うのです。思わずそこまで調べるか?>と唸りましたが、確かに私は文理学部文科を卒業したのであって、文学部卒業ではありません。しかし、卒業直後の1954年4月には、文理学部は分離し、文学部・理学部として独立したので、わかりやすいように文学部卒業と書いていたのです。

以上のようにく1931年神戸市生まれ・1954年神戸大学文学部卒>という私の履歴は二カ所で不正確であることは確かなのですが、そこまでの正確さが必要かどうか、首をかきげざるをえない問題でもあります。記録や歴史における「正確さ」とは何か、を考えるよすがともなれば、と思い、あえて個人の経歴を曝しました。



『渤海国』(講談社 学術文庫)

あのころはこんなだった

永田 良 (5 回生) 1957・昭和 32 年卒業 / 文学部 国文学専攻

平成27年5月の末つ方、「文窓会」で広報誌を編集しておられるTさんから電話をいただいた。戦後70年の今年、「文窓(ふみのまど)」で関連特集をやりたい、については、戦後間もなくの大学の、とりわけ文学部の様子を記憶を辿って書いてもらえないか、というのが趣旨だった。戦後のいわゆる「新制大学」を出発点としたら私は5回生であり、年齢は80歳だから、言ってみれば「生き残っている」立場ということになる。戦後70年と重なり合っていることは確かにそうだ。ただ、時系列的に、しかも正確に歴史を辿るほどの記憶はないし、資料もない。どうしても断片的な「思い出話」レベルになってしまうことをお許しいただきたい。



グリークラブ5回生のグループ (昭和 30 ~ 31 年)
経済・経営・法・工・そして文の永田さん (左端)

「ジュニア課程」その1

昭和28年4月、私は神戸大学文理学部文科に入学した。当時は入学後1年半は「教養課程」で言うところの一般教養を履修する制度下にあった。しかも、その「教養課程」は、「姫路分校」と「御影分校」に分かれて設置されていた。どちらの分校に行くのか入学生には選択権はなかった。私の場合は「御影分校」であり、当時「文理学部」そのものは御影学舎の一角にあったから、結果的に私は4年間ずっと御影に通ったのである。

阪神電鉄「御影駅」のすぐ北に在って、授業の合間、電車の発着をボヤッと眺めていたものである。

後日談だが、御影学舎は後年神戸市立御影工業高等学校が使い、一度更地になったあと、一大ショッピングモールに生まれ変わって今に至っている。

「ジュニア課程」その2

昭和28年4月に入学した私たちの前に先輩学生が数人現れた。4月の20日前後のことだ。突然声高に何か言

い始めた。初めは何を言ってるのかよくわからなかった。そのうち、「メーデー」とか「労働者」とかの単語が聞き取れるようになって、最後は「5月1日のメーデーに労働者とともに参加しよう。」というアジ演説なんだ、とわかるひと幕もあった。高校からポツとやってきた「世間知らず」の18歳が受けた最初の「大学生体験」だった。



筆者近影

「ジュニア課程」その3

9月、前期試験。教官は試験用紙を配ると教室を出て行ってしまった。当時御影分校では「無監督試験」が行われていたのだ。むろん、最初に趣旨説明はあったはずだが実はよく覚えていない。学生自治だとか、学生の自覚を信用して、だとか当然そういう説明であったろうがなぜか記憶にない。どうして無監督制が始まったのか、それにはそれなりの歴史的背景があるのだろうかこれも「世間知らず」の私には胸がドキドキする体験だった。

この後日談。この制度はなぜか後期試験からなくなった。「なんでもかなりの不正行為があったらしいぜ」という噂が流れた。無監督制廃止に関して学生側からの「抵抗」とか「抗議」が巻き起こった、という記憶も実はまったくないから噂はたぶん真実だったのだろう。

「ジュニア課程」その4

ジュニアのクラス分けは第2外国語別になされた。英語は全員必修で何人かの教官が我々を指導されたのだが、厳格な方、柔軟な方、タイプはさまざまであった。中の「厳格」に属するある教官が、学生の授業に対する反応のあまりの鈍さにあきれ果てて、授業途中で研究室に帰ってしまわれたことがあった。何人かの「真面目な」学生が謝りに行って、一件落着かと思っていたら、翌年その教官は近隣の国立大学に移ってしまわれた。その大学で「神戸大学の学生は一向に勉強せん」と愚痴られたという話が後日我々の耳に入ってきて、一様にバツの悪い思いをしたのは苦い思い出である。

「シニア課程」その1

1年半のジュニアのあと、学生たちはやっと入学したそ

れぞれの学部へ行くことになった。昭和29年4月、「文理学部」は「文学部」と「理学部」に分かれていたので、私は当然文学部に所属した。ただ「何科」に行くかはようやくここで決めることになる。当時、文学部には「哲学科」「史学科」「文学科」があった。私は「文学科」の中の、「国語国文学」を専攻することにした。



国文科5回生有志が島田先生のご自宅2階をお借りしてコンパを催した (昭和 30 年代)

「国語国文学」というコースは文学部開設当初はまだ存在していなかった。「文学科」は「英米文学専攻」コースしかなかった。3回生の時代になってようやく「国語国文学専攻」コースが誕生したのである。私は5回生だから草創の時期に身を置いた者のひとりということになる。教授陣もまだそろっていなかった。首都圏の大学や研究機関に居られた気鋭の研究者が徐々に神戸に着任されつつあった時期だった。「国語国文学専攻」としては処女回生の3回生がその先生方を駅頭でお出迎えした、ということもあったと聞いた。私がシニアに進んだちょうどその時、中世文学の永積安明、近代文学の猪野謙二、国語学の島田勇雄、お3人揃い踏みという恵まれたタイミングだったのである。

「シニア課程」その2

国文科に限ったことではなく、当時の文学部の学生はたしかに多士済々だったと思う。姫路分校から来た学生の中には、旧制高校生そのままに、弊衣破帽、高下駄で学舎内を闊歩する者がいた。「彼は特攻隊の生き残りだ」と噂された謎めいた人もいた。いったいこの人は何歳なのだ、と首をひねったくらいの年高の人や、教室のうしろで将棋ばかり指している2人組もいた。特徴的だったのは、他学部合格、入学したのに、文学部に転入してきたという人が結構いた、ということだ。「文学をやりたい」「本気で哲学を学びたい」など、動機はきわめて純粋だったように思う。他学部比べて文学部には女子学生が多かつ

た。「経済学部には女子学生は3人しかいないそうだ」などの話はよく出ていた。だから、学部内ロマンスもそれなりにあったと思う。のちに結婚された方を私も何人か存じあげている。

「シニア課程」その3

当時尼崎に公務員宿舎があつて、着任して来られた教授方の中で、まずその宿舎に住まわれ、1~2年後にもう少し広い住宅に移る、という方も多かった。中世文学の永積教授もそうされた方だが、私は卒論の関係もあって永積先生宅によく出入りしていたので、引越しのお手伝いなどもさせていただいた。芦屋市内の集合住宅に移られる際、役所への届け出など一切をお引き受けして、尼崎と芦屋の間を走り回ったことも、今となっては懐かしい。

島田教授のご自宅が御影学舎にほど近かったので、国文科の学生は回生を問わず島田家をよく訪れていた。休講があつて時間が空くと、島田先生のお宅へ行くのである。先生がお留守でも妹さんがおられたから平気で上がりこんで勝手にお茶など飲んでた。

島田先生に就職先を探してもらった者、結婚話をまとめてもらった者、もちろん仲人していただいた者、それぞれ枚挙に暇はない。私は仲人はしていただかなかつたが、式にご臨席いただいて祝辞を頂戴した。島田先生は、神戸に来られてからやや遅めに結婚なさつたのだが、奥様も学生のお相手をそれはよくしてくださつた。

戦後70年と神戸大学(文学部)の思い出を語り始めると、たしかにまだまだありそうだが、いずれも脈絡ははっきりしない。最初におことわりしたように、記憶は断片的だし、時系列も正確ではない。昭和39年、文学部は御影の地から六甲台の真新しい学舎に移転したのだが、私の中の文学部は、痕跡すら残っていない御影の殺風景な学舎の片隅に今もひっそりと息づいているようだ。



国文科4~6回生の親睦会 (昭和 30 ~ 31 年、箕面の滝にて)

神戸は地元と違う、私の居場所

元辻 貴子 (哲学専修)

さあどうしたものか。

書き出しに悩み始めてから、大変時間が経ってしまいました。

無事に文学部を卒業してから半年、現在私は地元岡山で就職し、日々忙しくも充実した日々を送っています。

今いるフィールドは百貨店。入社前、上司からは、「こんなはずじゃなかった」と思いながら3年は働け、と脅されていました(笑)。たしかに実際は、イメージにあったような綺麗なことばかりではなく、予想を覆されることが多々あります。ですが幸いなことに、私は今がとて楽しく、恵まれた環境で仕事に打ち込むことができている。

寂しく思うことといえば、ひとり地方に戻ってしまったために、大学でできたたくさんの友人となかなか会う機会がないことでしょうか。仕事の都合上休みが平日になることが多く、「会いたい人に会いたい時に会える」ということの大切さを実感することが増えました。

たまに神戸に遊びにくると、地元とは違う、私の居場所を再確認します。読書室に入り浸っては、くだらない話(ばかり?)をしたり、ときには議論を交わしたり。あの時間が懐かしくて恋しくなります。いつかもう一度、あの場所に戻ることができたらいいな、そう思う気持ちが確かにあります。(恩師にはあまり信じてもらえませんが)

大好きな神大、大好きな文学部、つらいことがあったら、ここで過ごした楽しかった出来事を思い出して、これからも頑張っていこうと思います。

(株式会社天満屋 岡山本店勤務)



地元で開催された祭りに、会社から踊り子として参加させていただきました。

ことばとアイデンティティを得た神戸大文学部

角田 哲朗 (東洋史専修)

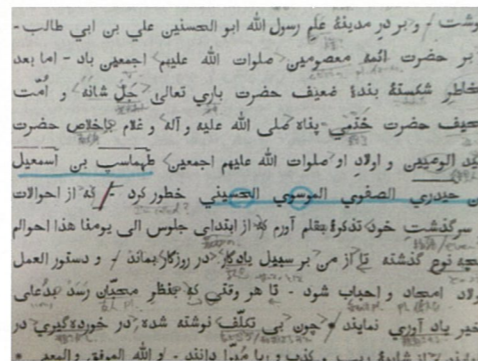
私が文字通り^{おぐら}晴としていた東洋史専修を卒業し、京都大学文学研究科西南アジア史学専修に進学して5か月が経ちました。近況報告といいますが、学部時代と変わらず、文献に向かう日々です。右の写真は、その翻訳をこの夏の目標として取り組んでいます。Tadhkirat-i Shah Tahmasp と呼ばれる書物の1頁です。馴染みのない方には、^{おみず}蚯蚓が這っているようにしか見えないアラビア文字で書かれたペルシア語文献ですが、神戸大学文学部東洋史専修に所属しておれば不思議と読めるようになります。

これは16世紀のイランのある王が書いた覚書なのですが、時空を超えてこの縁もゆかりもない書物にアクセスできる能力こそが神戸大文学部で獲得したものであります。一方で、文学部で得たものは何もこのような技能だけにとどまりません。私のような協調性に難のある人間は、所詮男は一人、自分一人きりで生きてゆくものと日々考えておりました。ところが不思議なもので、思わぬ方向からこの青臭い考えに修正を迫られました。それは他ならぬ歴史学でした。

他の研究分野もそうだと思うのですが、卒業論文を書くにあたって要求されるものは語学能力だけでなく、先行研究の把握で、むしろそちらのほうが困難さを伴うものなのかもしれません。目の前に積み重なった膨大な先学たちの研究。それを消化することなしには何を書いても無意味ですが、逆に言えばそれらを自由に活用できるのは現在を生きている私の特権。なにせ私は2015年を生きているのですから、世界最新の男です。

そう考えればこそ、私も何か意味のある研究を成し遂げ、連綿と続く史学史の一部に収まりたいと生まれて初めて所属意識を感じるようになりました。私は生活空間こそ移しましたが、ことばとアイデンティティを得たのは、神戸大文学部です。これからしばらくの間は歴史研究に没入します。この先飯が食えるのか、不安は尽きませんが、以上をもちまして近況報告に代えさせていただきます。

(京都大学文学研究科西南アジア史学専修)



文学部での学びを活かして

井 友樹 (国文学専修)

毎日のように眺めていたはずの神戸の街と海が、今では懐かしく感じられます。私はこの春から、地元の公立高校教員として働き始めました。教師という職業は、ベテランも新人も関係なく、新学期が始まれば教壇に立って、同じように授業せねばなりません。また、未経験である競技の部活顧問も任せられ、慌ただしい日々が始まりました。まず思い知ったのは、教員の多忙さです。平日は教材研究や公務分掌などで残業が当たり前ですし、土日、祝日は部活の練習や試合の引率があります。他にも学校行事や研修、試験問題の作成や採点など、休む間もありません。改めて、大学時代がいかにか自由だったかを痛感します。

とはいえ、大学生活を振り返ってみて、悔いはありません。学生時代、やっておいて良かったと思うことの一つは、四年間を通しての「文窓賞 学生レポートコンクール」への応募です。課外活動を毎年文章にまとめてきたことは、自分の大きな財産となっています。文窓賞に書いた、東北やカンボジアでのボランティア、英国短期留学などの経験を、生徒にも折を見て話すことがあります。彼らはいつになく真剣に、私の言葉に耳を傾けます。自分の経験を自分の言葉で語ることが、子ども達には一番伝わるのかもしれない。

さて私は今、アクティブラーニングなるものに挑戦しています。アクティブラーニングとは、「思考を活性化させる学習形態」のことです。これは大学のグローバル人文学などで、実際に自分が受けてきた授業形態でもあります。一方的に教師が講義をするばかりではなく、生徒が能動的に取り組めるように、ペアワークやグループワーク、音読や作文などの言語活動を多く取り入れています。生徒同士での話し合いや、教師と生徒との対話を重視し、古典や現代文の面白さや深みを味わってもらおうと努力しています。失敗することもしばしばで、決して上手とは言えない粗削りな授業ですが、それでも、私が毎回何か新たなことに挑戦していることは伝わるようで、生徒たちは積極的に沢山意見を述べるようになりました。生徒から新たな読みを教えられることも多々あり、充実した時間を送っています。これからも、文学部で学んだことを最大限に活かして、子ども達に学問の魅力を伝えていきたいです。

(県立高校、国語科教員)



3月25日 平成26年度卒業生歓送パーティー

午後2時半より「LANS BOX」2階にて、文窓会主催による平成26年度卒業・修了祝賀&歓送パーティーを開催。午前中、ワールド記念ホールにて全学での学位記授与式(学部・博士前期)を終えた卒業生たちは、六甲台に戻ってパーティーに臨みました。

出席は対象学生がほぼ100名・先生方・文窓会役員・関係者を入れて百数十名で、少し狭い会場が殆どダークダックス状態!始めに文窓会会長、続いて藤井学部長の挨拶の後、乾杯の音頭でパーティーがスタート。歓談の中では、教授方からリレー方式で卒業生に送る言葉が披露され、続いて同窓会からの景品の抽選で盛り上がりました。

この機会をとらえ、卒業する同期の中で文窓会の学年幹事を選び、今後の同窓会活動への参加協力を願い、一言挨拶をして貰いました。そろそろ夕暮れが近づく頃、卒業生の前途に幸多からん事を祈念しつつ、万歳三唱でお開きとなりました。例年女性の構成比が高いため、常に華やかな雰囲気が漂うイベントとして定着しているこのパーティー。男子学生は殆どがスーツ姿で参加していたが、未だ服に着せられている感じの学生が散見され、頬を緩めながら、又いつ六甲台に戻って来てくれるのか?文窓会が待っているよ、と心の中で呼びかけました。

(吉田筆)



終戦前後の思い出

片村 恒雄（8回生） 1960・昭和35年卒業／文学科 国文学専攻

B29長距離爆撃機が、南から北方向に流れる湯舟川沿いに、その上空を編隊を組み轟音を発して飛んで行く。空はどこまでも青く澄みわたる夏の空であった。子供心にも、あの飛行機が近くの都市を爆撃するのだと、戦争の恐ろしさを、肌で感じないではいられなかった。アメリカの飛行機が日本の空を我がもの顔に飛んで行く。

私の郷里は、旧国名でいえば但馬の、日本海に面した香住から20キロばかり矢田川を遡った、その支流の湯舟川沿いの山間地にあった。当時は、射添村、そのうちの入江村である。戸数は50戸ばかりの村である。どの家にも子供が沢山いた。

私が国民学校(旧制の初等教育の学校)に入学したのは、昭和19年4月(1944年)である。ミリタリズムに基づく教育が行われていた時代である。が、教科等でこれがその内容だったということは、まだ幼かった故か、記憶が定かではない。

しかし、校門を入るとき、そして出るときには、必ず御真影を安置する奉安殿に向かってお辞儀をした。その記憶は鮮やかに蘇る。そういえば、儀式のとき、学校長が「教育勅語」を奉読したことを思い出す。教育勅語は「大日本帝国」の教育理念を述べた天皇の公式な意思表示のことばであって、これを読み聞かせることは極めて重要な学事行為であったということを、後に知った。明治憲法のもとでは、教育に関わる一切の立法・行政は、天皇の命によって行うものであった。奉安殿の御真影は非常の場合、学校長は命をかけて守らなければならないものであったという。

私が国民学校に入学した昭和19年4月前後の、日本国内の状況はどうであったか。

2月25日に「文部省、食糧増産に学徒500万人動員を決定」、4月1日「六大都市の国民学校学童に1食7勺(1勺は1合の10分の1)の給食開始」、4月28日「閣議、米穀増産及供出奨励に関する特別措置を決定(供出報奨制)」と、食糧に関わる決定があいついで出されている。6月30日には「国民学校初等科児童の集団疎開」が閣議決定され、実行されたが、食糧確保が大きな問題だった。

戦況は、7月7日「サイパン島守備隊3万人全滅」、10月24日「レイテ沖海戦(日本連合艦隊の主力を失う)」、10月25日「神風特攻隊、初めて米艦に突撃」と、食糧も戦況も追い詰められていく状況にあった。私の兄などは勤労動員で勉学どころではなかった。

入江村では、召集令状が来た青年が、出征の日にお宮さんに集まった村人を前に、「お国のために力いっぱい戦ってきます」と挨拶をし、村人が村境まで見送った。子供心にも切ない気持ちになったことを思い出す。

先に述べた食糧のことであるが、日に日に切迫していった。農家である私の家が、「供出」のためお米が食べられなくなっていったのである。村では入山という1時間ほどで登れる山を開墾し、村人が一生懸命に耕して雑穀やさつま芋などを作って、命をつないだ。

当時村人は戦争について、不平も不満も口にはしなかった。私の家でも、父も母も意見らしいことは何も話さなかった。ただ母は、戦後の国民のまとまりのためには、天皇の位存続が役割を果たすのではないかと、言っていた。また、中国は国がまとまれば、大きな力を持つ国になるだろうと言っていた。

満州に開拓民として渡っていた村の人が、戦後九死に一生を得て、かろうじて入江村に帰り着いた。その話を直接聞いて、奇跡的な脱出行だったのだと、その苦難を、私は子供ながらに思いやったことである。

昭和20年8月15日、天皇の戦争終結の詔書の放送(玉音放送)。第二次世界大戦の終結。

射添村が、入江村が、直接戦火に巻き込まれるということではなかったが、子供心に、やはり戦争を仕掛けるということは、あってはならないことだと思ったことである。太平洋戦争で、日本は何を教訓として得たのであろうか。国として個人として学び得たものを忘れてはならないし、それを若い世代に伝えていかなければならないと思う。

中学生になって、社会科の時間に、講和条約締結を祝う壁新聞を喜びの気持ちで作ったことを、今思い出す。この時、初めて未来に希望が湧いてきた。ただ、今思うと残念なのは、この講和条約が全面講和によるものではなかったということである。・・・

2.26 事件の年に生まれた私の敗戦前夜

根本 勇（9回生） 1961・昭和36年卒業／哲学科 社会学専攻

生まれたのは2.26事件の年、勇ましい軍人になれと「勇」と名付けられた。物心つくと戦争色いっぱい。「紀元は二千六百年……」の歌を聞き、シンガポール陥落祝賀の旗行列を見た。昭和18年4月国民学校初等科入学時の校長訓話は、今もほぼ覚えている。

「日本は皇紀2600年を越える。敵国の米英は西暦1900年ちょっと。日本は戦争に負けたことがない。蒙古との戦い、日清、日露の戦争みんな勝った。だから大東亜戦争も絶対に勝つ。少国民として体を鍛え、お国のために働く、立派な人間になってもらいたい」

教室には世界地図がかけてあり、日本軍の進攻先がその都度赤インクで塗られる。担任の女先生が毎朝「兵隊さんがここまで攻めました」と説明する。若いこの女先生は泣き虫で、理由もわからず教卓に泣き伏してしまう。私たちももらい泣きした。

18歳の私の長兄が海軍を志願すると言い出し、家の中が重い空気に。翌19年2月横須賀海兵団に兄が入隊する朝、親類や近所の人々が小旗を振りながら「出征おめでとう」とつめかける。家族は笑顔で「ありがとうございます」と応対する。だが、いつもは愛想のいい祖母がいない。血相変えた祖父が隠居部屋に急ぐ。ついていくと祖母は泣いていた。

「おタカ、泣くんじゃない。世間に知れたら何と言われるか。涙をふいて笑って顔を見せるもんだ」、「だってあの子が兵隊になってしまうんだよ……」と、二人でヒソヒソ。祖母はついに部屋を出なかった。

春になると連日の空襲で、警報にそなえてラジオはつけっ放し。防空頭巾をかぶりゲートル巻いて登校し校庭で避難訓練をした。避難といっても、地面を掘り下げただけの防空壕に、目と耳を手でふさいで伏すに過ぎない。

本番では、米軍のB-29が低空で飛ぶのが見える。機銃掃射の物凄い音がするのだが、不思議と私たちにあたらない。今思うと、米軍は子供とわかって私たちをねらい打ちしなかったのだろう。

こんなことがあった。機銃掃射の最中、いきなり女先生が大声で泣き出し、壕から立ち上がってしまった。錯乱した彼女に男先生が駆け寄って壕に押し込めた。女先生にしてみれば、小さい私たちが心配で、いつも張りつめ、心が不安定になっていたに違いない。

北風の強い夜中、空襲警報でたたき起こされ、家の防空壕に急いだ。途中、大人たちが声もなく立ちつくしている。西の空いっぱい真っ赤で、赤黒く明滅する。東京湾をへだてた都心の空襲の火は見なれていたが、3月10日未明のそれは異様だった。私はふるえが止まらなくなり、お袋にしがみついていた。

朝になると太陽が赤黒い。火災の煙が房総の空をおおってしまったのだ。気が付くと、ノートやお札の焼け残りがあちこちに落ちている。布団をかぶった避難者が歩いて来る。子供心にもただごとでないことが解った。だれもが言葉少なだった。

3年生になると学校に兵隊が泊まり込み、訓練し始めた。疎開学童がふえ空襲は毎日、もう勉強どころではない。梅雨のころ手榴弾の使い方を教わった。敵をなるべく近くに引き寄せ、60度角で投げて敵を殺せという。

後で知ったことだが、米軍は九十九里浜に上陸、100メートル幅の道路を作りながら東京湾に出て、そこから一挙に銀座―大手町を突く計画で、これに日本軍が備えていたのだとか。何のことはない。首都防衛のために私たち子供を使おうとしていたのである。

敗戦2日前の8月13日朝、家から100メートルもないところに500キロ爆弾が落ちた。この時は防空壕に行くこともできず、押し入れに家族みなが布団をかぶってしのいだ。投下地点が沼地だったので破片が飛ぶことはなかったものの、わが家の屋根は割れてしまった。機銃の連続音に耳をふさぎながら、私はもう止めて欲しいと、心底何ものかに祈り続けた。

手榴弾は使わずにすんだものの、多感な年頃にさしかかっていた戦後の方が、私にはせつなかったし、荒れた気分は大学にまであった。拙宅近くの千葉大学本部は敗戦まで兵器を研究する東大工学部だった。

広大なキャンパスから今はテニス打球の音が絶えない。学園通りにはさまざまな国の言葉が飛び交う。平和そのものである。剣によって立つものは剣によって滅ぶという。聖書のこの言葉はアメリカを筆頭に先進国文明の基底をなす。私たち日本人は甘く考えていないだろうか。

この子らに 銃をとらすな 九月来る

米菓を中心に「ご当地商品」「外国人観光客向けのプロモーション」を展開。

須田 和恵 (58 回生/国文学専修) 2010・平成 22 年卒業

地元・新潟の米菓メーカーで奮闘の毎日

神戸大学を卒業後の2010年4月から、出身の新潟に戻り地元の製菓メーカーで営業企画・販売促進の業務に携わっています。我々の会社は米どころ新潟で、米菓(あられ・おかき・おせんべい)を作るメーカーとして誕生した企業です。創業からまだ50年とすこしという、伝統ある日本の米菓業界の中では最後に



「雪の宿」のイメージキャラクター「ホワミル」は、商品や会社のPRに活躍中。ゆるキャラグランプリ2015にもエントリーしています。

類する企業ではありますが、おかげさまで現在では全国各地のお客様に商品をお召し上がりいただいております。

取り扱う商品のイメージからお菓子業界は夢のある業界だと思われる方もいらっしゃると思いますが、それほどそのようなこともなく、国内の少子高齢化や人口減少、食品の安心・安全に対する消費者の意識の高まり、輸入原材料の価格高騰…など、さまざまな問題に悩まされている業界です。我々も一企業としての存続・成長と、業界全体の今後に対する危機感を高めており、そういった課題を乗り越え、お菓子を召し上がられるお客様に今後もおいしい笑顔をお届けすることができるよう、さまざまな新しい取り組みを行っております。

米菓以外の新たなカテゴリに挑戦

まずは一企業として、お菓子業界の活性化につながれば…という思いから、米菓製造のノウハウを活かして他のカ

テゴリに類する商品の開発に挑戦しています。これまで50年来米菓のみを製造・販売してきたのですが2012年には「かりんとう」と「おまんじゅう」を、2014年からは「スナック菓子」を開発・発売するなど、米菓製造のノウハウとそれぞれのカテゴリのお菓子の製造ノウハウ、その双方を活かした商品の展開に挑戦しています。もともと米菓分類の商品しか作ってこなかった当社が他のカテゴリの商品を開発・発売することで新しい風を吹き込み、お菓子業界の活性化や発展のきっかけになればという思いです。

「ご当地商品で」お菓子を食べる時間をより楽しく

また、商品をお召し上がりいただく消費者に目を向けますと、「地元愛の高まり」「地方」への再注目」が、昨今のお菓子業界を取り巻く新しい傾向として目にとまるようになってきました。「地元愛の高まり」「地方」への再注目」という点では、少し古い話ではありますが各地の“ご当地キャラクター”や“B級グルメ”の人気上昇に端を発して、2011年の東日本大震災を契機とした東北各県の復興応援を目的とする東北名産品への注目、また昨年2014年は北陸新幹線開業による北陸への注目…などというように、いま、日本全国のいわゆる“地方の味”“地元のもの”への消費者の志向が高い状況が続いています。



2014年3月まで販売した期間限定の東北応援商品。東北各県のご当地の味を米菓で再現し、お届けしました。

これにより製菓メーカー各社としても、各地の名産品や名物を使用した商品の開発を活発に行っており、他社と同様に当社でも米菓を中心として「ご当地商品」の製造・販売を行っています。米菓という気軽にお買い上げいただける商品、お客様にさまざまな“ご当地の味”をお届けすることで、お菓子を食べる時間をより楽しく過ごしていただければと思っています。

外国人観光客に人気の“日本らしい”お土産を



海外からの観光客のお客様が特に好まれるフレーバーは抹茶味やわさび味。外国人観光客の方がよくご来店されるお店では、こういったポスターを掲示するなどして商品のPRを行っています。

また“地方”への再注目」と少し似ていますが、外国人観光客の方々からの需要というのも、お菓子業界にとっての新しい動きのひとつです。北海道から沖縄まで全国各地の観光地に足を運ぶと、海外から日本に観光に来られている方々が本当に増えてきていることを肌で感じるのですが、これがお菓子業界にも新しい風を吹き込んでいます。この外国人観光客の方々から日本のお菓子をお土産に買って帰られるのですが、彼らが求めているのはいわゆる“日本らしい”お菓子。そのため、スーパーマーケットでお手頃価

格で販売されている米菓やかりんとう、おまんじゅうが人気商品となっているようなのです。

当社は今日現在、まだ積極的には海外での商品販売が行えてはいませんが、国内でお土産としてお買い上げいただいた商品が、いずれは世界各国からの日本のお菓子への引き合いにつながっていくことを夢に、また、今後の本格的な海外展開も目標にしつつ、まずは国内での外国人観光客向けのプロモーションに取り組んでいます。

今回ご紹介させていただいたのは新潟の一製菓メーカーの小さな活動の一端でしかありませんが、我々がこうして“新しい何か”に取り組んでいくことで、お菓子を召し上がられる消費者の皆様が笑顔をお届けし続けることを目指してまたいつかはもっと多く、世界中のお客様に日本のおいしいものを届けることができることを夢に、これからも挑戦し続けていきたいと思っています。



ホワミルは、地元新潟を盛り上げるため、各地のご当地イベントにも積極的に参加。真夏のイベントは中の人(私)も大変です…

7月29日 神戸オックスフォード日本学プログラム修了式

同プログラム第3期生は、昨年10月に来日し、文学部の特別聴講生として2学期にわたる日本文化や歴史など各自の研究課題に取り組んできました。当日は文学部B棟331教室にて、発表や討論が活発に行われ、引き続き「修了式」が開催されました。写真はの様子と夕方より瀧川記念学術交流会館で開かれたパーティーの様です。



5月13日 文窓会主催「新入生歓迎ティーパーティー」

今年も、恒例となった文窓会主催「新入生歓迎ティーパーティー」が、文学部本館の1階で開催されました。

武藤美也子文窓会会長の挨拶に続き、今年から文学部長(文窓会名誉会長)に着任された増本浩子先生にもご挨拶をいただきました。

その後、軽食をとりながら学生同士で歓談。少しお腹が落ち着いたところで専攻ごとに分かれ、新入生たちは各専攻の先生や先輩を囲んで話し合いの時間をもちました。

目先の利益を求める世の風潮の中、「人文社会系学部は社会の要請にこたえられていない」といった乱暴かつ無理解の極みとも言える意見もまかり通っています。

そんな今、文学部をあえて志望し入学してきた新入生たちです。彼ら・彼女たちへの期待は、こんな時代だからこそ高まる、と言えましょう。



中部支部便り

2年ぶりの総会・懇親会を開催。記念講演は「日本の工芸と博物館の現状」(5月30日)

中部支部は、第9回総会・懇親会を5月30日、名古屋・池下のホテル「ルプラ王山」で、神戸の文窓会本部から武藤美也子会長を招いて、7人で開催した。2年ぶり。

名古屋市博物館で調査研究員として活躍中の小川幹生氏が、「日本の工芸と博物館の現状」をテーマに記念講演をした。小川氏は1974年、哲学科芸術学卒業。名古屋市博物館で工芸部門を担当している。

小川氏は、工芸とはそもそも何か、西洋と日本の工芸のとらえ方の違い、西洋では絵画、彫刻、建築は美術のジャンルに入るが、金工、陶磁、染色は工芸でくられ、職人の仕事とされてきたことを説明。繊細な日本の工芸が19世紀後半の世界を魅了することもあった。明治6年(1873)ウィーン万国博覧会に初めて公式参加した日本政府は名古屋城のシンボル・金のシャチホコを持っていき、日本の工芸のレベルをアピールしたエピソードも披露した。一方、現在の博物館はいつでも、増え続ける収蔵品に悩んでいること、デジタル保存が進み、デジタルならで

はの問題点も多く、博物館の多難性を語った。

中部支部は設立10年を経過した。本来なら喜ばしい事柄だが、残念ながら今回は出席者が少なく寂しい開催になった。理由はいろいろ考えられるが、最大の要因は会員の高齢化だろう。設立当時の中心メンバーも10歳年をとり、以前のように自由な活動に支障をきたすようになってきた。この傾向は今後も続くので、次世代へのバトンタッチを急ぐ必要がありそうだ。(中部支部・勝原 博)



写真の前列中央が小川幹生さん

東京支部便り

I 第11回文窓会<東京支部>総会を開催(2月24日)

参加者 ●S32年卒/竹歳一夫、廣瀬祝子 ●S33年卒/高見秀史 ●S35年卒/河野房子 ●S36年卒/橋本静子、白藤禮幸、中野裕 ●S37年卒/五味尚子、日下部俊子 ●S38年卒/浜島代志子、長山博美 ●S40年卒/松澤昭史 ●S47年卒/田中勉(敬称略順不同)

ゲスト 文窓会本部から吉田浩次(S43年卒) 西川京子(S44年卒)

- 議題**
- ① 東京六甲クラブの現状報告
特に新規会員募集に注力! 会員数は23年度30名、24年度25名、25年度23名、26年度(27年1月末現在)26名。少なくとも23年度の30名を超え、文窓会の会員総数の目標:80名を目指したい。皆様の協力をお願いする。
 - ② 今後の文窓会東京支部の運営
次回も文窓会の総会は、文窓会担当の木曜会の日と同時に開催とする。(今回は講師のご都合で火曜日となった)
 - ③ 参加者の現況報告 ④ ゲスト吉田様、西川様より文窓会本部の現況
ゲストのお二人には、OBとの親睦と同時に、現役との親睦および活動の補助~新入生の歓迎・教授陣との顔合わせ、文窓賞などなど現役へのバックアップ活動を紹介いただいた。
 - ⑤ 文窓会東京支部の活動報告
現在の役員として、東京支部会長・中野裕、副会長・五味尚子・田中勉の陣容にて、年に数回開かれる代議員総会、理事会への参加、東京六甲クラブの運営に参画、他の部(現在11部)との行事の打ち合わせ、調整などを行っている。

文窓会東京支部へのお問い合わせは下記へ
事務局:〒223-0064 横浜市港北区下田町1-1-113 中野 裕
TEL & FAX: 045-561-6317 / E-Mail: y.nakano.1938-panda@d9.dion.ne.jp

II 文学部担当の木曜会<講演会>(同日)

「仏画の魅力とその見方、楽しみ方」

講師 神戸大学大学院人文学研究科 増記隆介准教授
ご夫婦連れ、仏教・仏像に興味をお持ちの女性を含む比較的若い層からの参加も頂き、「あっという間に時間が過ぎた、もっと、お話を聞きたかった」「お話に引き込まれた」「面白かった、仏画に興味を持てた」と好評でした。

木曜会で講演中の増記隆介先生



文窓会(文学部同窓会) — 会計報告 —

平成26年度収支計算書
(平成26年7月1日~平成27年3月31日)

平成26年度財産目録
(平成27年3月31日現在)

【収入の部】	
前年度繰越金	¥22,066,405
今年度収入合計	¥4,314,111
会費納入金	(3,660,000)
協力金	(586,000)
受取利息	(2,111)
行事受取会費	(66,000)
収入合計	¥26,380,516

【支出の部】	
事業活動費	¥2,129,526
会報費	(1,331,058)
歓送迎会費用	(20,730)
総会費	(320,000)
文窓賞費	(364,938)
ホームページ管理費	(64,800)
人件費	(28,000)
新入会員記念品	0
協力金費	¥780,000
学友会費	(110,000)
活動援助費	0
学術助成費	(650,000)
学祭援助費	(20,000)
事務局費	¥559,528
事務業務委託報酬	(450,000)
家賃、光熱費	0
通信費	(57,391)
消耗品費	(52,137)
什器備品	0
支払手数料	¥27,008
郵便振替料	(24,200)
振込手数料	(2,808)
その他支払手数料	0
旅費交通費	¥105,690
会議費	¥101,128
交際接待費	¥131,500
租税公課	¥422
今年度支出合計	¥3,834,802
次年度繰越金	¥22,545,714
支出合計	¥26,380,516

I. 資産の部		¥22,545,714
現金	(182,890)	
(池田泉州銀行) 普通預金	(111)	
(みなと銀行) 普通預金	(1,705)	
(ゆうちょ銀行) 普通貯金	(1,450,748)	
(ゆうちょ銀行) 振替口座	(2,123,720)	
(みなと銀行) 定期預金	(8,061,500)	
(みなと銀行) 定期預金	(1,006,375)	
(みなと銀行) 定期預金	(1,508,665)	
(ゆうちょ銀行) 定期貯金	(8,210,000)	
II. 負債の部		¥0
III. 正味財産合計		¥22,545,714

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

平成27年6月22日

会計監査 花木直彦 印
会計監査 河島真 印

注記
*会計期間変更(6月末決算から4月末決算に変更)のため、今会計期間は9か月となった。
*期末後の主な支出は以下の通り
・歓送迎会費用(卒業祝賀パーティケータリング) ¥400,000,-
・(支部)活動援助金(東京、中部) ¥100,000,-
・(事務局)家賃・光熱費 ¥107,575,-

神戸大学学友会のご案内

神戸大学学友会は各学部同窓会の相互交流と大学の発展に寄与するため、同窓会の連合体として組織され、各学部同窓会から選出された人々による幹事会で運営されています。具体的な活動としては、幹事会や大学役員との懇談会のほか、大学広報紙「風」編集委員会、神戸大学クラブ(KUC)運営委員会、データベース委員会などです。

神戸大学学友会を構成している同窓会:事務局は〈神戸大学企画部社会連携課〉

- 文窓会(文学部) ●紫陽会(教育学部・発達科学部) ●社団法人 凌霜会(経済学部・経営学部・法学部・国際協力研究科)
- くさの会(理学部) ●社団法人 神緑会(医学部医学科) ●就進会(医学部保健学科)
- 社団法人 神戸大学工学振興会 KTC(工学部) ●六篠会(農学部) ●翔鶴会(国際文化学部) ●海神会(海事科学部)

「神戸大学クラブ」(K・U・C)に入会しませんか

神戸大学卒業生が学部の壁を越えて、交流をはかり親睦を深める集いです。(神戸、大阪、東京でそれぞれが活動を展開)

ご入会ご希望の方は TEL 078-851-3433 までご連絡ください。(K・U・C運営委員 日高 健一)

文窓会ホームページをご利用ください!

卒業生や大学関係者のみなさんの交流の場です。いろいろな形で利用が可能ですので利用を希望される方は下記メールアドレスまでご連絡をお願いいたします。kobeuniv.sakamoto@gmail.com(担当:坂本/文窓 Web 担当、社会学32回生)

文窓会役員(平成27年9月末現在)

会長 武藤美也子(43年卒・国文学)

<その他の役員>

日高 健一(36年卒・芸術学) 花木 直彦(36年卒・国史学) 三宅 征彦(41年卒・社会学) 田中 賢司(42年卒・社会学) 廣野 幸夫(43年卒・社会学)
吉田 浩次(43年卒・社会学) 西川 京子(44年卒・西洋史学) 田中 睦子(46年卒・芸術学) 坂本 直樹(59年卒・社会学) 田中 康二(63年卒・国文学)
河島 真(H3年卒・国史学)

表紙の題字は、文学部国文学教授 福長 進先生にご依頼しました。

<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/> (検索→文窓会)